

自然談話における終助詞「ね」と「よ」のイントネーション

張海霞(東京学芸大学大学院) 白勢彩子(東京学芸大学)
m161419k@st.u-gakugei.ac.jp shirose@u-gakugei.ac.jp

1. はじめに

日本語の会話において、終助詞の「ね」と「よ」は高頻度に出現し、話者の意図を伝達する重要な役割を担っている。イントネーションにより、「ね」と「よ」は意味機能に変化があるが、二つの関係を体系的に議論した研究は多くない。そこでイントネーションと意味機能の関係をより詳しく記述するため、我々は文に上昇調、平坦調、下降調三パタンの文末イントネーションを付与し、意味判定実験を実施した(Zhang and Shirose,2016)。その結果、「ね」は下降調を伴うと「不自然」と高く判断され、「よ」は下降調を伴うと、「困惑」「非難」のような不快な意味に判断される傾向があることが分った。

本稿では、前回の聴取実験を踏まえ、自然談話における終助詞「ね」と「よ」及びイントネーションパタンの出現状況を調べ、意味機能の関係を検討する。

2. 先行研究

終助詞「ね」と「よ」の意味機能に関しては、従来多くの研究が行われてきた。金水(1993)「ね」は話し手は聞き手と知識を共有するため、「確認」「同意を求める」の意味機能を持ち、「よ」は聞き手の知らない知識を教えるために用いられると述べた。メイナード(1992)は、話し手と聞き手のそれぞれの情報量の状況から、終助詞「ね」と「よ」の使用条件を呈示した。金水とメイナードのように、情報帰属あるいは情報量の視点から、終助詞「ね」「よ」の意味機能を議論した研究が多いが、イントネーションとの関係を論じた研究は多くない。終助詞の意味機能は終助詞の元々の意味とイントネーションとの相互が関わると述べた片桐(1997)、自己内省で終助詞「ね」と「よ」の意味を分析した小山(1997)音声合成で「ね」の機能の境界を論じた杉藤(2001)、ピッチ曲線でイントネーションを分類し、意味機能を分析したデイヴィッド(2013)がある。しかし、自然談話において、終助詞「ね」と「よ」のイントネーションがどのように現れるについての調査はほぼない。

本稿は自然談話を前提として、終助詞「ね」「よ」のイントネーション様子を呈示しつつ、意味機能との関係も検討する。

3. 方法

3.1 資料

『千葉大学 3 人会話コーパス』は日常場面に近い自然な会話を収めた、大学生・院生・ポスドクを含む 3 人からなる友人同士 12 組の雑談、7599 発話のデータである。今回の調査ではこのコーパスを利用し、終助詞「ね」と「よ」の生起頻度を調査した。

3.2 対象となる文の選別基準

『日本語国語大辞典』で、「終助詞は文の終わりにあって、命令・疑問・反語・願望・禁止などの意味を決定し、または陳述の意味を強めたり、感動を表わしたりする助詞」と定義していることから、文の中間で使用される文を対象外とする。今回の調査でも、複合助詞、接続助詞との接続、疑問詞、相槌表現も対象外とした。具体的な標準は表 1 に示す。対象となる文は表 2 のような文である。

表 1 対象外とする基準

基準	例
A 文間で使用される「ね」「よ」	私はね
B 複合助詞	よね、かね
C 単独使用	ね
D 接続詞と接続する場合	思うけどね
E 疑問詞	いつ…ね
F 相槌表現	そうだね

表 2 対象となる文

番号	例
1	水冷売ってるよ
2	今週末ぐらいだったね
3	大昔だね
4	怖かったよ
5	すごいね

3.3 文末イントネーションの分類基準

音響分析ソフトウェア Praat に基づくピッチ曲線の視察および聴覚印象により、終助詞「ね」「よ」のイントネーションパターンを分類した。

今回の調査では、終助詞「ね」と「よ」部分のイントネーションを上昇調、平坦調、下降調、複合音調に分類した。上昇調と平坦調の区別について、10Hzで分けた。「ね」と「よ」内の音調は10Hz以上上昇した場合、上昇調をし、10Hz以内で変動する場合、平坦調とした。複合音調も10Hzを基準にし、2か所以上で10Hz以上変動すると、複合音調とした。ピッチ曲線を抽出されない場合もあり、知覚による判断とした。以下は上昇調(図1)、平坦調(図2)、下降調(図3)、複合音調(図4)のサンプル(Praat分析画面)である。

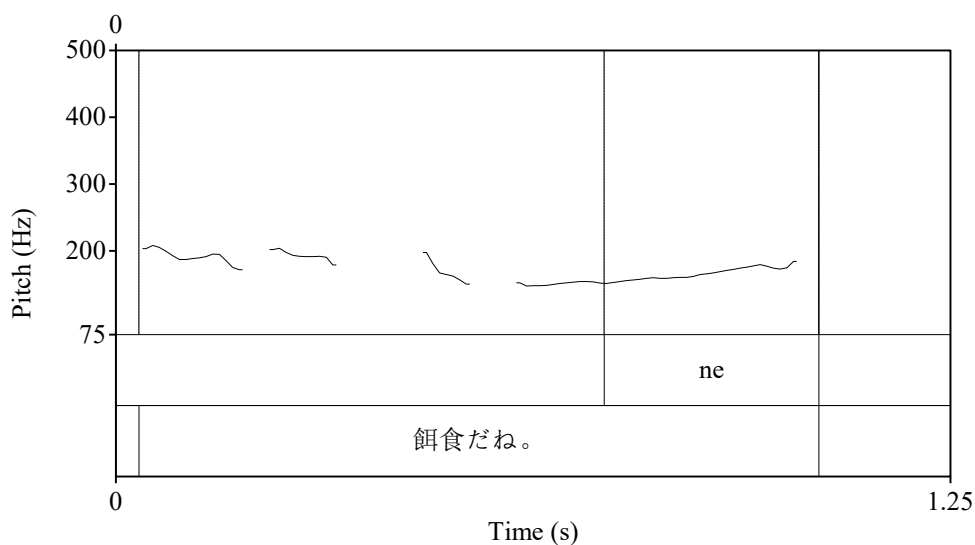


図1 上昇調

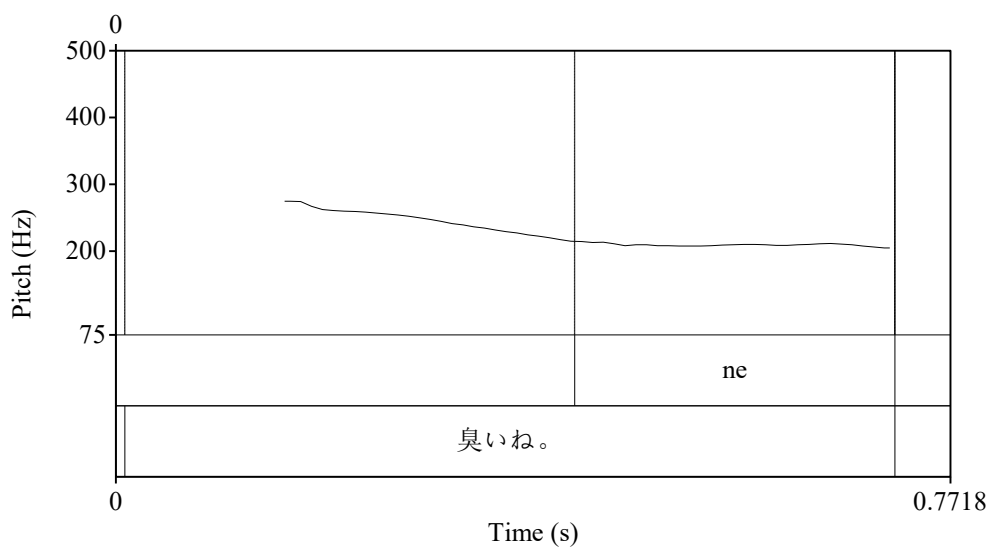


図2 平坦調

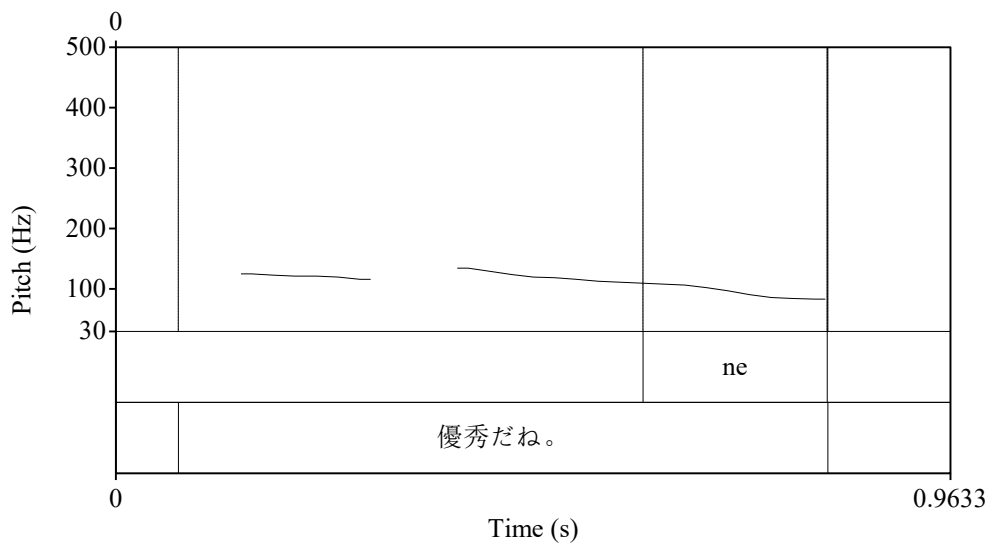


図 3 下降調

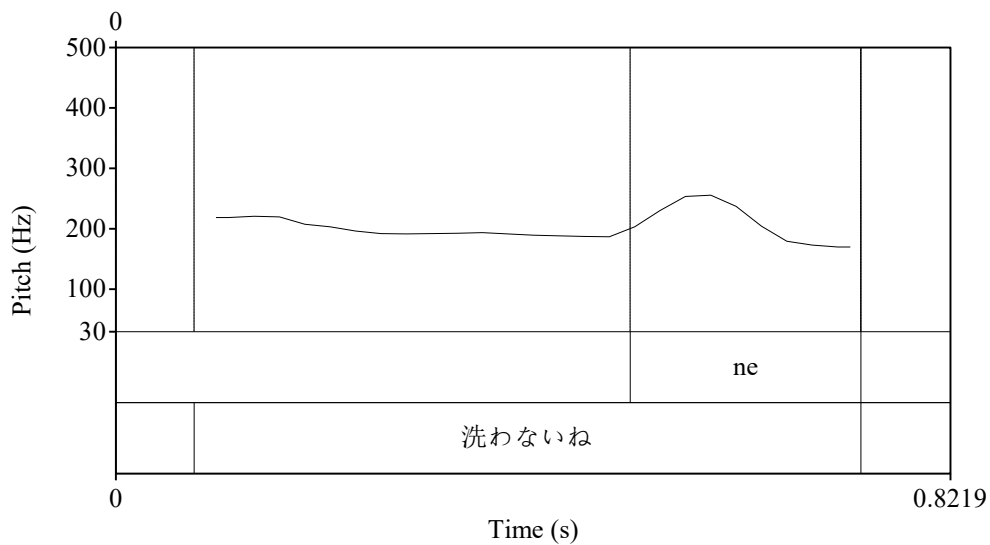


図 4 複合音調

4 結果と考察

3.2の選考基準により、「ね」と「よ」、それぞれ84発話と145発話が抽出された。終助詞「よ」の使用数は「ね」より約1.7倍多く生起していることが分かった。イントネーションの分類の結果、終助詞「ね」と「よ」の出現数をそれぞれ図5と図6に示す。

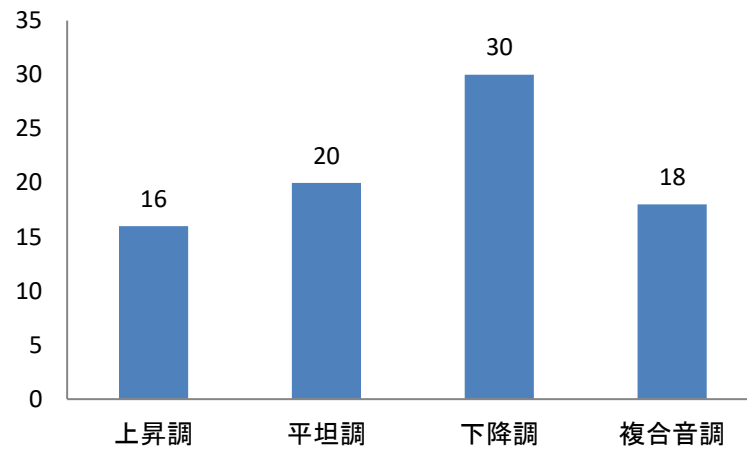


図5 終助詞「ね」のイントネーションパタンの出現数

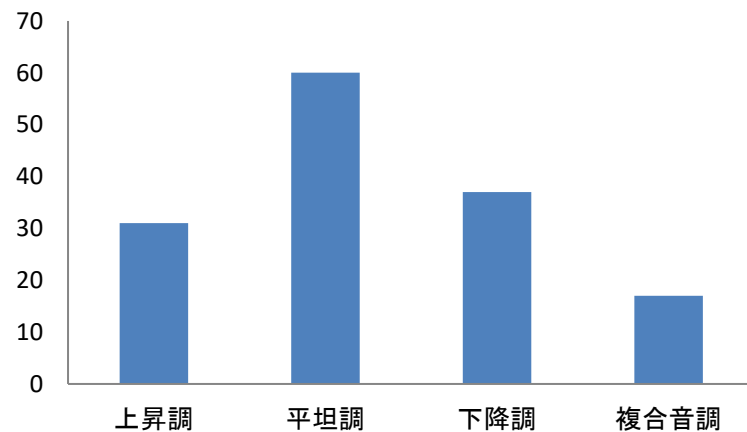


図6 終助詞「よ」のイントネーションパタンの出現数

終助詞「ね」の出現状況について、上昇調 16(19.1%)、平坦調 20(23.8%)、下降調 30(35.7%)、複合音調 18(21.4%)という結果となった。下降調は他の音調より多く出現することが分った。前回の聴取実験では、下降調になると、不自然(61.5%)と判断されやすく、イントネーションによる意味機能の変動が大きくないという結果があった。ただし前回の聴取実験では、下降調になると、「感心」というような意味が高く判断される傾向があった。今回の調査で対象とした自然談話では、「感心」のような自己感情を表す意図が多く出現し、このことが下降調の生起に反映したと考えられるだろう。

終助詞「よ」の出現状況については、上昇調 31(21.4%)、平坦調 60(41.4%)、下降調 37(25.5%)、複合音調 17(11.7%)という結果となった。複合音調はあまり出らず、平坦調が主に出現したことが分った。前回の聴取実験では、「よ」の上昇調、平坦調、下降調について、不自然と判断されにくく、どれでも許容して使用いられるという結果があった。下降調になると「困惑」「非難」のような不快な意味になる傾向があり、「よ」の意味機能はイントネーションにより変動しやすいとの結果があった。今回の調査結果から見ると、平坦調を主に出現することで、話し手と聞き手が談話をスムーズに進められるように、意味機能を抑え、イントネーションを採用したと考えられる。

5 まとめ

コーパス分析の結果から、自然談話において、終助詞の「よ」は「ね」より多く使用されていることが分った。終助詞「ね」について、非上昇調が主に出現し、「感心」というような自己感情を表す発話が多かったと考えられた。「よ」については、平坦調が主に出現することは、自然談話を順調に続けるため、意味機能を抑えたと考えられるだろう。自然談話における、終助詞の意味機能とイントネーションの相互関係の詳細については、今後の課題としたい。

参考文献

- 金水 敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『言語』第 22 巻第 4 号, pp.118-121.
- メイナード・泉子・k (1993) 『会話分析』 pp.101-109,くろしお出版.
- 伊豆原 英子 (1993) 「「ね」と「よ」再考-「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から」 『日本語教育』 80 号, pp.103-114.
- 伊豆原 英子 (2001) 「「ね」と「よ」再再考」『愛知学院大学教養部紀要』第 49 巻第 1 号, pp.35-49.
- 小山 哲春 (1997) 「文末詞とイントネーション」『文法と音声』 pp.97-119,くろしお出版.
- 片桐 恭弘 (1997) 「終助詞とイントネーション」『文法と音声』 pp.235-256 ,くろしお出版
- 杉藤 美代子 (2001) 「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」『文法と音声Ⅱ』 pp.3-16,くろしお出版.
- 大島 デイヴィッド 義和 (2013) 「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」『国際開発研究フォーラム』 43, pp.47-63
- Zhang and Shirose (2016) A study of Japanese modal particles “ne” and “yo”, Journal of Acoustical Society of America, 140-4, P3394.